



筑紫女学園大学リポジト

ネルヴァルとポトツキの神秘思想

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 間瀬, 玲子, MASE, Reiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/172

ネルヴァルとポトツキの神秘思想

間 瀬 玲 子

Le mysticisme chez Nerval et Potocki

Reiko MASE

I . 序

ポーランド貴族の出身でフランス語による作品を残したヤン・ポトツキ Jan Potocki (フランス語表記は Jean Potocki 1761 1815) は日本ではあまり紹介されることがない。しかし筆者が過去にネルヴァルがポトツキから受けた影響について論じた時とは比較にならないほどにヨーロッパでの研究が進んでいる。とりわけベルギーのルーヴァンに本拠地を持つ出版社 Peeters から全集が発行されたのが特筆すべきことだと考えられる⁽¹⁾。

本論文では最新の研究成果を踏まえて、以前の論文執筆時に不明だった点の解明を試み、次に神秘思想に関してネルヴァルとポトツキの共通点を考察してみたい。

II . ポトツキの研究状況

ポトツキが執筆した作品の中で最も有名なのは『サラゴサ手稿』 *Manuscrit trouvé à Saragosse* であることは誰も異論はないと考えられる。『サラゴサ手稿』はフランスではポケット版の形で販売されてきた。他の作品も単行本の形では刊行されてきた。しかしまとまった形で作品が刊行されないで、全貌を把握することが困難であった。

序でも書いたようにポトツキはポーランド系の作家である。その作品がフランス語で書かれていたとしても、残された作品や書簡がフランス以外の場所に保管されている場合がある。研究が非常に困難であった原因のひとつがそこにある。

序でも書いたようにここ数年ポトツキの研究は熱心な研究者のおかげで非常に進んだ。ベルギーの出版社である Peeters からポトツキ全集 6 巻が刊行された。以下にその 6 巻の内容を列挙する。

Vol. I : Voyages 1

Vol. II : Voyages 2

Vol. III : Théâtre Écrits historiques Écrits politiques

Vol.IV, 1 : *Manuscrit trouvé à Saragosse* (version de 1810)

Vol.IV, 2 : *Manuscrit trouvé à Saragosse* (version de 1804) +CD Rom

Vol.V : Correspondance Varia Chronologie Index général

第1巻 旅行記 1 冒頭に全集全体の説明

引用された作品一覧付き

2004年刊行

第2巻 旅行記 2 引用された作品一覧付き

2004年刊行

第3巻 演劇 歴史的な作品 政治的な作品

引用された作品一覧付き

2004年刊行

第4巻の1 『サラゴサ手稿』(1810年版)

引用された作品一覧付き

2006年刊行

第4巻の2 『サラゴサ手稿』(1804年版) CD ROM 付き

原稿を使って編者たちが作成した版

2006年刊行

第5巻 書簡 雑文集 年譜 全体の索引

この巻で引用された作品一覧付き。全体の索引では人物索引、場所・民族・出来事の索引、文学作品タイトルの索引の3種類がついている

2006年刊行

ポトツキの年譜は全集第5巻の巻末に掲載されている⁽²⁾。ポトツキは1761年3月8日(日付は異論もあり)にウクライナのヴィニツィアの北西で生まれた。ポトツキ家はポーランドの最も力を持ち、最も古い貴族の家のひとつである。しかし1815年12月11日にピストルで自殺した。近年の校訂版や研究書にはこの日付が書かれている。

全6巻を刊行した Peeters や他の出版社から続々と研究書も発行されている。全集が刊行されたことが契機となり、今後も益々より詳細な研究がなされると思われる。

Ⅲ．ネルヴァルによるポトツキへの言及

ネルヴァルがポトツキについて言及した箇所はたった1箇所である。それは以前の論文でも引用したが、今回は前後もかなり長く引用してみよう。ネルヴァルはある劇作品に関する記事を『プレス』紙1850年8月12日号に掲載している。

Nous en avons lu un autre plus saisissant encore dans un roman du comte Potocki. Deux cavaliers espagnols discutaient, en soupant à Barcelone, sur l'existence du Purgatoire ; animés par les fumées du Xérès ou du Valdepeñas, ils se firent ce serment solennel que le premier qui mourrait viendrait dire à l'autre ce qu'il en était. [...]

L'un des amis resté seul dans la ville ne manqua pas tous les soirs, à l'heure dite, d'ouvrir la fenêtre et de faire à voix haute la question. [...] Le malheureux avait été ce jour là tué en duel à Bilbao.⁽³⁾

私たちはポトツキ伯爵の小説の中でもっと人の心をとらえるような別の話を讀んだ。2人のスペインの騎士がバルセロナで夜食を食べながら、煉獄の存在について議論をしていた。ヘレス（Xérès はグゼレスまたはクセレスと発音する。今はヘレスという地名）またはヴァルデペナスの酒気で興奮した彼らは死にかけた前者が他方に対してそのような状態であることを言いに来ようであろうという厳かな誓いを立てた。（中略）

友人の一方は毎晩決められた時間に窓を開け、大きな声で質問をした。（中略）その不幸な者はビルバオでその日に決闘で殺された。

ネルヴァルのプレイヤッド版の編者はこのような挿話はポトツキの『サラゴサ手稿』には書かれていないと明言している。そこですでに紹介したポトツキ全集の4巻の1と4巻の2を調査した。その際 Xérès（Jerez の別の書き方。ヘレス）と Valdepeñas（ヴァルデペナス）の二つの単語に注目した。Bilbao（ビルバオ）はこの二つの単語とは切り離して考える。Xérès はスペインのアンダルシア州カディス県のヘレス周辺でとれる白ワインで、シェリー酒と言われている。Valdepeñas はスペインのカステリーヤ・ラ・マンチャ州のシウダー・レアル県の村の名前であり、ワインで有名である。残念ながら『サラゴサ手稿』には二つの単語は書かれていないし、二人の騎士が死後に再会を約束するというエピソードもない。Valdepeñas に関しては『サラゴサ手稿』の注に編者は一箇所だけ次のように書いている。

Si Alphonse a bien emprunté la route de Valdepeñas, il est revenu sur ses pas puisque le Guadalquivir, qui traverse Andujar, coule d'e. en o.⁽⁴⁾

もしアルフォンスがヴァルデペナスの道を取ったら、彼は来た道を引き返した。というのはアンドゥハルを通るグアダルキビル川は東から西に流れているからである。

この注はネルヴァルの頭の中でポトツキの『サラゴサ手稿』と Valdepeñas が結びついていることが的外れではないことを証明している。またヴァルデペナスとグアダルキビル川も遠くはないことも理解できる。なお Xérès は『19世紀ラールス百科事典』*Grand Dictionnaire universelle du XIX^e siècle* では白ワインで有名であると紹介されているが、Valdepeñas はこの事典に紹介すらされていない

い⁽⁵⁾。

ネルヴァルはポトツキの『サラゴサ手稿』を読むかまたは人からその話を聞き、その舞台となる土地と Xérès と Valdepeñas という二種類の酒を結びつけてしまった。また別の小説のエピソードとポトツキの作品を混同してしまったのかもしれない。

19世紀半ばのフランスでは Xérès と Valdepeñas が文学作品の中で使われたという証拠が見つからない⁽⁶⁾。そんな単語をわざわざ劇評論の中でなぜネルヴァルが書いたのかという疑問が残る。ネルヴァル自身は作品の中でスペインのことを何度も言及しているが、それほどスペイン通とは言えない。それに対して親しい友人テオフィル・ゴーチエ Théophile Gautier は1840年5月から10月までスペインを旅行し、その紀行文は1843年2月に『山々を超えて』*Tra los montes* と題して出版された。1845年に『スペイン旅行』*Voyage en Espagne* と改題して出版された。ポケット版の巻末にある旅行地図を見ると Valdepeñas と Jerez (Xérès の別の表記) が記されている⁽⁷⁾。この旅行では Bilbao には行っていない。まず Valdepeñas についてのゴーチエの記述を見てみよう。

Valdepeñas n'a rien que de fort ordinaire, et il doit toute sa réputation à ses vignobles.⁽⁸⁾

ヴェルデペナスは普通のものしかない。そしてその評判のすべてはワイン畑のおかげである。

ゴーチエの描写は短くそっけない。次に Jerez (Xérès の別の表記法) に関する描写を見てみよう。

Jerez, comme toutes les petites villes andalouses, est blanchie à la chaux des pieds à la tête, et n'a rien de remarquable en fait d'architecture que ses *bodegas*, ou magasins de vins, immenses celliers aux grands toits de tuiles, aux longues murailles blanches privées de fenêtres.⁽⁹⁾

アンダルシアのすべての小さな町と同様にヘレスは上から下まで石灰で真白であり、その *bodegas* またはワインの店、大きな瓦の屋根、窓がない長く白い壁のある非常に大きな貯蔵室以外に注目すべき建築物は何もない。(文中の *bodegas* はワインの店を意味するスペイン語)

ヘレスに関する描写はヴァルデペナスよりもかなり長い、やはりワインに関することを描写している。ゴーチエにとってこの二つの町の特徴はワインであることは確かである。

以上のようにゴーチエの『スペイン旅行』はフランス文学作品ではあまり言及されることがない Xérès(ゴーチエは Jerez と表記)と Valdepeñas の二つの単語が出てくる。その影響を受けてネルヴァルはポトツキの作品と二つの地名を結びつけてしまったのではないだろうか。

それでは先ほど切り離して考えた Bilbao ビルバオについて考えてみよう。ネルヴァルがポトツキを言及した劇評論を発表したのは1850年8月である。劇評論という理由から直前の二人の動きを調べてみると、二人の親密さがよくわかる。前年である1849年5月末に二人で一緒にロンドンに旅

行し、ネルヴァルが先に帰国している⁽¹⁰⁾。同年8月から9月にかけてゴーチエはバスク地方の旅に
でかけビルバオで闘牛見物をしている⁽¹¹⁾。ビルバオはポトツキの『サラゴサ手稿』24日の挿入話の
中で登場する。まず『ポトツキ全集』第4巻の1（1810年版）を引用してみよう。

En arrivant à Bilbao, j'appris que ma mère s'était embarquée pour l'Amérique.⁽¹²⁾

ビルバオに到着すると、私の母がアメリカに向けて乗船したことを知った。

同じ24日の挿入話に以下のようにも書かれている。

Au bout de trois mois, je vis arriver la Girona; elle était revenue d'Amérique et avait déjà été chercher
son fils à Madrid dans le couvent où il devait faire son noviciat. Ne l'y ayant point trouvé, elle était allée à
Bilbao et avait suivi les traces d'Hermosito jusqu'à Burgos.⁽¹³⁾

3ヶ月後、私はラ・ジローナが到着するのを見た。彼女はアメリカから戻ってきており、息子
が修練を行うべきマドリッドの修道院にすでに探しに行っていた。そこに息子を見つけることが
できなかったので、彼女はビルバオに行き、ブルゴスまでのエルモシットの足取りを追った。

この挿入話は主たる話に挿入された話である。この話の中でビルバオの町の特徴は何も書かれてい
ない。

以上のように『サラゴサ手稿』の中ではビルバオは重要な地名ではない。ゴーチエからビルバオ
について直接話を聞いたネルヴァルは、劇評論の中でビルバオを言及したと考えたほうがより自然
である。以前の論文にも書いたがポトツキの『サラゴサ手稿』がどのような形で19世紀前半のフラ
ンス人の目に触れたのかは不明な点が多い。話をネルヴァルに限定したとしても本当のところはよ
くわからない。ただし想像以上に文学者の世界は狭いサークルだったのかもしれない。フランス語
で書かれた『サラゴサ手稿』という作品の面白さは話題にはなったと考えられる。

ネルヴァルの劇評論でのポトツキへの言及は『サラゴサ手稿』そのものに加えて、ゴーチエが過
去に書いた『スペイン旅行』やつい最近のゴーチエの旅の土産話などが混ざってしまったと考えら
れる。

IV．ネルヴァルとポトツキの共通点

すでに述べたようにポトツキは1761年に生まれ、1815年に亡くなっている。それに対してネル
ヴァルは1808年にパリで生まれ、1855年にパリで亡くなった。この二人に接点は何もない。『ポト
ツキ全集』第5巻の年譜によるとポトツキのパリ滞在は以下のとおりである。なお滞在したと書い

であっても、常にパリにいることを意味しない。パリを拠点として頻繁に旅行もしている。

1785年 パリに妻と滞在。後にパリで子供二人が生まれる。

1786年 バック通りのスタール夫人の家に入出入りする。

1787年4月 ポトツキはパリに滞在する。

12月 イギリス旅行からパリに戻る。

1790年11月 パリでスウェーデン大使のスタール男爵と会う。またミラボーやラファイエットとも会う。

1791年2月 パリを離れる。

11月 フランスに戻る。

12月16日 パリを離れる。

1802年 パリ旅行を計画したが断念?⁽¹⁴⁾

このように『ポトツキ全集』に掲載された年譜に記載された事項によると、1785年から1791年まで断続的にパリに滞在したことになる。ネルヴァルとポトツキは年代的にも境遇の面からも直接接触したことは一度もないと断言できる。しかし以前論文にも書いたが両者の関心の対象に共通点がある⁽¹⁵⁾。その中でもやはり『サラゴサ手稿』第9日に挿入された「カバリストの話」*Histoire du cabaliste* においてカバラ学者であるドン・ペドロ・デ・ウセダ don Pedre de Uzeda が語るエノクに注目してみよう。その前にエノクとはどのような人物であるのかを旧約聖書の『創世記』で見よう。

Et ayant connu sa femme, elle conçut et enfanta Hénoch. Il (Caïn) bâtit ensuite une ville qu'il appela Hénoch, du nom de son fils. (Genèse, chapitre IV, 17)⁽¹⁶⁾

カインはその妻を知った。彼女は身ごもり、エノクを生んだ。彼は町を建て、息子の名前にちなんで、その町をエノクと名づけた。(『創世記』4:17)⁽¹⁷⁾

『創世記』の別の個所では以下のように書かれている。

Il marcha avec Dieu, et il ne parut plus, parce que Dieu l'enleva. (Genèse, chapitre V, 24)⁽¹⁸⁾

エノクは神と共に歩み、神が彼を取り去ったので、彼はいなくなった。(『創世記』5:24)⁽¹⁹⁾

日本語訳として引用した岩波書店版『旧約聖書』にはエノクに関して「神と共に歩んだエノクの人生は死までが神の意志に委ねられた、ということ。後に、エノクは死を経ずに天界に移された」と解され(中略)、洪水を予告した終末の啓示者、知恵の教師として理想化されるが(『エノク書』)

(略)」と注が書かれている。『エノク書』は聖書の偽典のひとつである、日本語では「エチオピアエノク書」と言われる本を読むことができる⁽²⁰⁾。その本によるとエノクは神とともに歩み、神の使いにより天界、地下の世界を見ることを許される人物である。

ポトツキの『サラゴサ手稿』第9日においてカバラ学者が語る話の中で次のような表現がある。カバラ学者が気を失い、美しい数人の若者の腕に抱かれ、若者の一人がカバラ学者に言った言葉の一部を引用してみよう。

Nous sommes gouvernés par le patriarche Hénoch qui a marché devant Élohim et qui a été enlevé de dessus la terre.⁽²¹⁾

我々はエロヒム（神の呼び名）の御前で歩き地上から運び去られた族長エノクによって統治されている。

上記で引用した『創世記』のフランス語訳と全く同じ動詞 enlever（運び去る）を使っている。しかし他のフランス語訳を見ると enlever ではなく prendre（連れていく）を使う場合もある。

この後カバラ学者はエノクの玉座の足元に出向く。そして二人の美女の色香に迷う。翌朝目覚めると絞首台の下にいて、死体が並んでいた。しかしこれもまた幻だったという話である。ポトツキが描いたエノクは不死の統治者であり、この世の者とは思えない人物であるのに、それがカバラ学者の悪夢へと導いていく。

ネルヴァルもまた人物としてのエノクを『暁の女王と精霊の王ソロモンの物語』*Histoire de la reine du Matin et de Soliman, prince des génies* 7章「地下の世界」Le Monde souterrain（『東方紀行』*Voyage en Orient* に収録された話）に登場させている。ネルヴァルはこの物語を「ナシオナル」紙 *National* 1850年3月24日号から4月25日号に掲載し、後に『東方紀行』1851年版の中に収録した。

エノクは主人公の天才芸術家アドニラムに向かって次のように言う。

... je laissai une nation dans ma ville d'Hénochia, dont les ruines étonnent encore les races dégénérées.⁽²²⁾

私はエノキアの中に一つの国家を残した。その廃墟はまだ退化した種族を驚かしている⁽²³⁾。

この作品の章のタイトルが「地下の世界」というのが重要な意味を持つ。エノクは地下世界の中で君臨するが、この作品の中では廃墟の主のイメージである。そこにネルヴァルとポトツキの共通点を見出す。単にエノクを小説に登場させるだけなら両者の共通点とは言えない。理想化された人物としてのエノクではなく、どちらかという終末観と結びつくような人物としてのエノクの描き方に両者の共通点があると考えられる。

ネルヴァルはディオラマに関する劇評論で人物としてのエノク及び大洪水時代の都市の両方に注

目している。この評論が19世紀前半に大流行した視覚芸術のひとつである「ディオラマ」を論じた評論であるという理由からどうしても舞台装置としてのエノクに比重がかかってしまうのかもしれない⁽²⁴⁾。ポトツキは都市としてのエノクには関心はない。その点では両者の関心の対象にずれがある。

以上のようにポトツキとネルヴァルの共通の関心として聖書の人物エノクを取り上げた。しかも聖書偽典の『エノク書』に出てくるような義人とはかなり違う人物像を両者が作り上げている。そしてそのイメージは決して明るいものではない。

ポトツキとネルヴァルは神秘主義に対して深い関心を抱いていた。両者の関心の共通点としてまずヴォルネー Volney を指摘する。ポトツキとヴォルネーに面識があったことは以前論文で論じたことがある⁽²⁵⁾。またネルヴァルがヴォルネーから影響を受けたことも論文で論じたことがある⁽²⁶⁾。ヴォルネーは18世紀から19世紀に活躍した哲学者であり、神秘主義と関連づけることは無理があると考えられる。ポトツキは主に旅行記執筆の際にヴォルネーの影響を受けている。なおこのポトツキとヴォルネーはほとんど同世代である。

バルテルミー・デルプロ Barthélemy d'Herbelot (17世紀の東洋学者で『東洋文庫』*Bibliothèque orientale*の著者)から影響を受けたことはポトツキ本人が旅行記の中で明記している。ネルヴァルがバルテルミー・デルプロの影響を受けたことは異論のないところである⁽²⁷⁾。

またポトツキはクール・ド・ジェブラン Court de Gébelin (18世紀フランスの碩学で『原始世界』*Le Monde primitif*の著者)にも歴史関係の著述で言及している。ネルヴァルがクール・ド・ジェブランの膨大な著書から関心のある箇所だけを読んで自らの作品創作に利用したことも異論はないと考えられる⁽²⁸⁾。

以上のようにポトツキとネルヴァルは神秘主義に関する著作をまるで教科書のように参照したとしかいいようがないほど共通の関心を持っていた。二人がなぜどのような過程で神秘主義に傾倒し、具体的にどのような著作から影響を受けたのかについての考察は今後の課題としたいと考えている。

V . 結論

2004年から2006年にかけて『ポトツキ全集』全6巻が刊行された。特にポトツキの主要作品である『サラゴサ手稿』の校訂版(1804年版と1810年版)が発行されたことは大きな進展だと考えている。また数々の研究書も発行されている。

本論文ではまずネルヴァルがポトツキについて論じた箇所が『サラゴサ手稿』に存在しないというプレイヤード版の編者の指摘を考察した。ネルヴァルが書いた文章の中の三つのスペインの地名に注目した。三つのうち二つの地名はポトツキの『サラゴサ手稿』本文には書かれていない。しかもネルヴァルは二つの地名をワインの生産地の意味で使っている。『サラゴサ手稿』の舞台がスペインであることから親しい友人であるテオフィル・ゴーチエから影響を受けという仮説をたてた。

ゴーチエが執筆した『スペイン旅行』にはその二つの地名が書かれている。しかもゴーチエは作品内で二つの土地の紹介の中でワインのことを言及している。このスペインの二つの地名はフランス文学作品ではあまり使われない。特に二つのうち一つは『19世紀ラールス百科事典』にも項目がない。ネルヴァルが言及した三つの地名のうち最後のひとつは確かに『サラゴサ手稿』において言及されている。しかしゴーチエがこの最後の一つの地に旅行したことがあることも忘れてはならない。ネルヴァルがポトツキに関して書いた死後再会する騎士のエピソードがどこにあるのかは依然として謎のままである。

またポトツキとネルヴァルの関心の対象には共通点が多い。その一つの例として『旧約聖書』の『創世記』のエノクについて論じた。エノクを描いた作家はこの二人だけではないかもしれないが、描き方に共通点があると考えられる。

今後の課題としてポトツキとネルヴァルの両者が関心を持った作家たち、特に神秘主義に関する作品を検証する必要がある。時代も生きた環境も違う二人の作家がなぜ共通の関心を持ったのかを詳細に検討することは意義あることだと考える。

注

- (1) 間瀬玲子「ネルヴァルとポトツキ」『筑紫女学園大学紀要』第15号(2003年1月) pp. 21-38においてネルヴァルがポトツキからどのような影響を受けたかを論じた。この時期は Jean Potocki, *Manuscrit trouvé à Saragosse*, Nouvelle édition intégrale établie par René Radrizzani, Paris, José Corti, 1994を使って研究を行った。
- (2) Jean Potocki, *Œuvres V, Correspondance, Varia*, éditées par François Rosset et Dominique Triaire, Louvain-Paris-Dudley, MA, Peeters, 2006, p.299. また Dominique Triaire, «Repères chronologiques» *Europe*, N° 863 (Mars 2001), pp.188-196. なお『集英社 世界文学大事典 4』集英社, 1997年, pp.135-136の「ポトツキ」(工藤幸雄執筆)には亡くなった年月日が1815年12月2日と記載されている。しかし近年の研究書では1815年12月11日と記載されているので、そちらの日付を採用する。
- (3) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome II, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec, pour ce volume, la collaboration de Jacques Bony, Max Milner et Jean Ziegler et avec le concours de Michel Brix et d'Antonia Fonyi, Paris, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1984, p.1169. 以下ネルヴァルのこの巻を PL .II と略す。
- (4) Jean Potocki, *Œuvres IV, 1, Manuscrit à trouvé Saragosse (version de 1810)*, éditées par François Rosset et Dominique Triaire, Louvain-Paris-Dudley, MA, Peeters, 2006, p.35及び Jean Potocki, *Œuvres IV, 2, Manuscrit trouvé à Saragosse (version de 1804)*, éditées par François Rosset et Dominique Triaire, Louvain-Paris-Dudley, MA, Peeters, 2006, p.7. この二つの巻の注は全く同じ文章である。この注を訳す際にヤン・ポトツキ著, 工藤幸雄訳『サラゴサ手稿』(世界幻想文学大系 第19巻), 国書刊行会, 昭和55年を参考にした。また Jean Potocki, *Œuvres IV, 1*, pp.19-22で紹介されている1847年に発行されたポーランド語訳版の電子テキストを入手した。上記の『ポトツキ全集』第4巻の1の22ページにはフランス語版(1810年版

及び1804年版)とポーランド語訳版の対照表が掲載されている。その対照表によるとポーランド語訳をした人の創作が含まれていることがわかる。このポーランド語訳の電子テキストはPDFファイルであり、検索にも耐えうる。そこで本論文で問題にしたような単語(フランス語の固有名詞)を検索して、確認作業を行った。

- (5) Pierre Larousse, *Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle*, tome 24, Nîmes, C.Lacour, 1991, p.1399.
- (6) CNRS と ATILF による全文データベース Frantext を使って Xérès と Valdepeñas を検索した。検索の対象年代を広く設定しても、全く検索結果は出なかった。この結果だけで断定することは控えたいが、フランス語で書かれた作品の中でこの二つの単語は使われることがあまりないとは言えると考えている。数年前から Frantext の個人契約が可能になった。
- (7) Théophile Gautier, *Voyage en Espagne*, suivi de *España*, Édition présentée, établie et annotée par Patrick Berthier, Paris, Gallimard, coll. «folio classique», 1981, pp.550-551にゴーチエの旅行地図が掲載されている。ゴーチエの『スペイン旅行』の引用はこのガリマール社のフォリオ・クラシック(ポケット版)を使用した。なおゴーチエの1811年から1847年までの年譜は Théophile Gautier, *Romans, contes et nouvelles*, tome , édition établie sous la direction de Pierre Laubriet, avec, pour ce volume, la collaboration de Jean-Claude Brunon, Jean-Claude Fizaine et Cluadine Lacoste-Veysseyre et Peter Whyte, Paris, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2002, pp.LXIII-LXXV を参考にした。また1848年から1872年までの年譜とゴーチエ関係書籍目録は Théophile Gautier, *Romans, contes et nouvelles*, tome II, édition établie sous la direction de Pierre Laubriet, avec, pour ce volume, la collaboration de Jean-Claude Brunon, Jean-Claude Fizaine et Cluadine Lacoste-Veysseyre, Paris, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2002, p.IX-XXVI et pp.1553-1574を参考にした。テオフィル・ゴーチエ作、井村実名子訳『モーパン嬢』(下)岩波書店、岩波文庫、2006年の巻末に収録された「テオフィル・ゴーチエ年譜」も参考にした。また Théophile Gautier, *Voyage en Espagne*, Présentation, chronologie et notes par Jean-Claude Berchet, Paris, Flammarion, coll. «GF», 1998, pp.5-14にも年譜が掲載されている。年譜に関してはこのフラマリオンのポケット版のほうがプレイヤッド版よりも詳細に記載されている。それによるとヴァルデペナスへの言及はない。ヘレスは1840年9月4日から11日までカディスに滞在したときに、ヘレスへ小旅行をしたと書かれている。この年譜は1848年までしか記載されていないが、1849年にゴーチエがスペインのビルバオへ行ったことだけは明記されている。
- プレイヤッド版第2巻の p. X によるとゴーチエは1849年8月20日から25日までのいずれかから9月14日までスペイン・バスク地方への旅にでかけ、ビルバオでは闘牛見物をした。
- (8) Théophile Gautier, *Voyage en Espagne*, p.239.
- (9) Théophile Gautier, *Voyage en Espagne*, p.423.
- (10) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome , édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec, pour ce volume, la collaboration de Christine Bomboir, Jacques Bony, Michel Brix, Jean Céard, Lieven d'Hulst, Jean-Luc Steinmetz et Jean Ziegler et avec le concours de Pierre Enckell et d'Antonia Fonyi, Paris, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1989, p.XLIV を参考にした。以下 PL.I と略す。
- (11) テオフィル・ゴーチエ『モーパン嬢』(下)の「テオフィル・ゴーチエ年譜」p.5による。
- (12) Jean Potocki, *Œuvres IV, 1*, p.263. なお参考までに Jean Potocki, *Œuvres IV, 2*, p.299も参考にした。ビルバオに関する限りこの二つの版の間に多少の違いがある。
- (13) Jean Potocki, *Œuvres IV, 1*, p.265. Jean Potocki, *Œuvres IV, 2*, p.301が相当する。なお『19世紀ラレーズ百科事典』ではビルバオは繁栄している都市として紹介されている。Pierre Larousse, *Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle*, tome 3, Nîmes, 1990, p.735による。
- (14) Jean Potocki, *Œuvres V, Correspondances, Varia*, pp.299-320.

- (15) 間瀬玲子「ネルヴァルとポトツキ」, pp 23 28 (前掲論文)
- (16) *La Bible*, traduction de Louis-Isaac Lemaître de Sacy, préface et textes d'introduction établis par Philippe Sellier, Paris Robert Laffont, coll. «Bouquins», 1990, p.10. *la bible*, Paris, Bayard, 2001も参照した。こちらの仏訳のほうがフランス語としてはわかりやすい。
- (17) 旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 I 律法』岩波書店, 2004年, pp .10 11 .
- (18) *La Bible*, p.11.
- (19) 『旧約聖書 I 律法』 p .13 .
- (20) 日本聖書学研究所編, 村岡崇光訳『聖書外典偽典 第4巻 旧約偽典Ⅱ』, 教文館, 1975年には「エチオピア語エノク書」の翻訳及び概説が収録されている。また関根正雄編, 『旧約聖書外典 下』講談社, 講談社文芸文庫, 1999年にもエチオピア語エノク書の抄訳及び解説が収録されている。
- (21) Jean Potocki, *Œuvres IV, 1*, p.119. Jean Potocki, *Œuvres IV, 2*, p.94が対応する。
- (22) PL. II, p.725.
- (23) 日本語訳をする際に『ネルヴァル全集 東方の幻』筑摩書房, 1998年に収録された野崎歎・橋本綱 訳『東方紀行』を参考にした。また旧版の『ネルヴァル全集Ⅱ』筑摩書房, 1975年に収録された中村真一郎・入沢康夫 訳『暁の女王と精霊の王ソロモンの物語』の翻訳及び注も参考にした。ネルヴァル, 中村真一郎 訳『暁の女王と精霊の王の物語』角川書店, 角川文庫, 平成元年(昭和27年初版発行)は1章毎に挿絵がついていて, 読者の理解を助けてくれる。
- (24) PL. I, pp.840-843.
- (25) 間瀬玲子「ネルヴァルとポトツキ」 pp 32 34 .(前掲論文)
- (26) 間瀬玲子「『東方紀行』における都市(7) - ヴォルネーがネルヴァルに与えた影響 - 」『筑紫女学園短期大学紀要』第36号(2001年1月) pp .1 17 .
- (27) 間瀬玲子「バルテルミー・デルプロの『東洋文庫』」『論叢』(筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部国際文化研究所)第16号(2005年8月), pp .116 124 .
- (28) 間瀬玲子「クール・ド・ジェブランの『原始世界』とネルヴァルの作品の関連性」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第1号(2006年1月), pp .129 137 .